

『白猿物語』成立論

森 田 雅 也

一

荷田在満著『白猿物語』（元文四（一七三九）年奥）は高い文芸性を有した作品である¹⁾。にもかかわらず、国文学者の誰によっても、本格的な研究がなされておらず²⁾、したがって近世文芸史にもその名を十分にとどめていない。それには、作品があまりに短篇である（文政三序『梟門遺稿』第四集所収本の場合、半紙本約25字×10行で五丁半）こと、作者荷田在満が本格的な国学者であって、戯作者ではないこと、作品が即事性を持った内容にもかかわらず、成立後七、八十年も経て版本とされたため、読者にその意図が十分に伝わらなかったことなど、諸般の事情が考えられるが、決して、その文芸性を評価せずしての理由ではない。したがって、本研究の最終的な目標は、その『白猿物語』の文芸性の解明にある。そのためには、多方面よりの作品世界の検討が必要となる。それゆえに本稿では、『白猿物語』の成立論を展開することを目的とし、本文研究と作品分析は別稿として報告している³⁾。右のような『白猿物語』の研究の一段階としての成立論であることをご了解頂いた上で、以下論じるものである。なお、本稿で用いている『白猿物語』の本文は、註(3)で報告した、諸本校合の本文を底本としている。

一

二

(イ) 『白猿物語』と『白猿伝』

『白猿物語』の梗概は次のようである。——相模の男が乗った舟が、大風に吹かれて無人島に漂着する。男は上陸して島を見回るが、その内に舟は出てしまい、一人取り残されることとなる。島には多くの猿が住んでいるが、その群の長で雌の白猿に助けられ、「ほがらかなる洞」の内に軟禁され、飢えを凌ぐうちに、男は白猿に「いもせのまじわり」を求められ、心ならずも交りを結び、子猿までもうけることとなる。こうした日々にも、男は故郷をなつかしみ、島に舟の漂着するのを待ち続け、三年が過ぎたある日、漂着してきた舟があり、助けを求め、すぐに舟に乗り込み島を離れる。浜では猿達が嘆き叫んで、白猿は「なきてはふし、おきてはさけび、……手をあげあしをつまたてゝ、くるしびまろび」していたが、今は及ばずと思ったか、「をたけびしつゝ、立あがり」、傍の子猿を抱いて千尋の底に飛び入った。——というもので、作者の友人小泉の何某が幼い時に、その相模の男と親しかった八十歳の老人から聞いた話とし、最後に白猿に代わって舟を慕う心を詠んだ歌二首をつけて終っている。そして奥書には、「元文未のとしみな月望の夜たはぶれにしるす」とある。

『日本古典文学大辞典』（岩波書店）の「白猿物語」の項目（大谷篤蔵氏御担当）には、梗概を示されたのち、「趣向」として、

作者の友人小泉某が、幼時に八十歳余の老人に聞いた話で、その老人は主人公と親しく、直接聞く所、と文中にあり、清水浜臣も序文中に、「つくりものがたりにはあらで、打聞（うちきき）ものがたりのさまなりける」というが、実は中国晋唐小説『白猿伝』に拠る作者の筆すさび。（※本文は清水浜臣序、文政四年刊『泉門遺稿』第四集所収本によっている。）

とされている。果たして、この『白猿物語』は、中国の唐代小説『白猿伝』（正式には『補江総白猿伝』であるが、以下『白猿伝』と略す。）の翻案であろうか。以下分析してみたい。

一方の『白猿伝』の梗概は以下である。——平南將軍蘭欽りんきんの別將歐陽紇が南征の折、同行の妻を魔物に盗まれる。慌てて探索し、その居所に行くと、多くの美女達が嬉遊歌笑しており、彼女達から妻の無事を確認し、魔物退治の手筈を打ち合わせ、改めて出直すことにする。魔物は白猿であったが、歐陽紇は女達との打ち合わせ通りに白猿を退治する。白猿は自らが千年を経た妖怪で、紇の妻が自分の子を懐妊したことを告げ、その子を殺さぬことを頼み息を引き取る。その子が、初唐の大書家歐陽詢である。——このような話である。この両者を細部にわたって比較すると次のようになる。

『白猿物語』

- | | |
|--------------------|----------------------|
| (a) ・雌猿である。 | ↓ ・雄猿である。 |
| (b) ・白いがただの猿である。 | ↓ ・一千歳の白猿で魔物である。 |
| (c) ・猿の群れの頭である。 | ↓ ・仲間はなく、美女達に傳かれている。 |
| (d) ・離島で、無人島である。 | ↓ ・人里離れた山奥である。 |
| (e) ・洞の中が居住空間。 | ↓ ・石門の中が居住空間。 |
| (f) ・洞の中に軟禁。 | ↓ ・石門の中に軟禁。 |
| (g) ・約三年間夫婦として暮らす。 | ↓ ・二ヶ月弱、夫婦として暮らす。 |
| (h) ・白猿、懐妊する。 | ↓ ・白猿、懐妊させる。 |
| (i) ・子猿（性別不明）生まれる。 | ↓ ・人の子（男）生まれる。 |
| (j) ・白猿・入水自殺。 | ↓ ・白猿、退治される。 |
| (k) ・子も共に入水死。 | ↓ ・子は死を免れ、大成する。 |

『白猿伝』

右のような結果は、相違点ともいえようが、『白猿伝』をそのままではなく、換骨奪胎し、翻案を行ったことを示していると仮定すれば、両者の関係として、一応の納得が得られよう。

ただ、仮定したのは、果たして在満が実際に『白猿伝』を読んだのであろうかという素朴な疑問が残るからである。

(四) 江戸期の『白猿伝』

『白猿伝』が江戸期に読まれていたことは、『酒顚童子』との関係で注目されていたという記事から知られる。曲亭馬琴は『玄同放言』巻三⁽⁶⁾において

桜陰腐談上巻に説郭正集百十三なる白猿伝を載て、酒顚童子の物語りは、これに縁りていで来つるならんといへり、そも由なきにあらねど、いまだ淵源を考へ得ざりしなり。

とするように「酒顚童子」と『白猿伝』を結びつける文学史観は存在した。「酒顚童子」と『白猿伝』について考察することは、既に黒田彰氏⁽⁶⁾のご論考があるので詳述を避けるが、両者の内容に関連があることは否定できない。そして、馬琴自身が『桜陰腐談』の説に共鳴するように、江戸期の知識人達も両者の関連を認めていたのである。近世随筆が「酒顚童子」に言及することは頗る多い。それは江戸期に「酒顚童子」物の芸能や読物が流行した事実⁽⁶⁾に比例しているのであろうが、一様に「酒顚童子」について触れる時は、『白猿伝』に言及している。『燕居雜話』卷之六や『嬉遊笑覧』卷九下などがそうであるが、『白猿物語』成立の元文四年以前では、『天地（乗燭）或問珍』（宝永七年刊）卷四、『扶桑記勝』（刊年不明ながら、著者貝原益軒（寛永七一—正徳四年）晩年の著作と考えられる⁽⁶⁾）卷六、『桜陰腐談』（宝永七年序、正徳二年刊）卷一、『広益俗説弁』（正徳五年序、享保二年刊）卷十、『湖亭渉筆』（享保十二年刊）卷二などが

ある。それでは、『白猿伝』が江戸期の人気書籍であったかという点、『白猿物語』成立の元文四年以前の書籍・書目集を検索しても、『白猿伝』の名は見当たらない。実際に右の随筆のいずれも、『白猿伝』と『酒顛童子』の趣向の似ていることを指摘してはいるが、本文との部分比較をする『湖亭渉筆』、『白猿伝』を全文を引く『広益俗説弁』『桜陰腐談』を除けば、各筆者が自身読んだものか、疑わしい余地も残している。だが、本文全文を引いた随筆があるところからも、『白猿伝』が江戸時代の一部の読者に読まれた事実は存在する。もっとも、在満がその読者に入っていたという確証はない。むしろ、右の随筆者達が読んだのと同じ形で、在満が『白猿伝』を手にした可能性が残されている。その場合、江戸期における『白猿伝』の輸入状況が問題となってくる。

Ⅱ 『白猿伝』の輸入状況

『白猿伝』は唐代の小説として、初唐あるいは中唐以降と、その成立時期が定まらない⁽⁹⁾。又、原『白猿伝』なるものは存在せず⁽¹⁰⁾、『補江総白猿伝』しか存在しない。その『補江総白猿伝』についても、江総作の『白猿伝』か、無名氏が『江総白猿伝』を集補したのか不明である。近藤春雄氏⁽¹¹⁾は、

江総の白猿伝を補ったという言い方は、作者にとつてはなかなか意味のあることであつたと考えられるが、といつて果して江総に白猿伝の作があつたかどうかは分らない。恐らくは作者が、わざわざそういう題に作りあげたものであり、しかも補の字の又、集補に作られている(『宋史藝文志』に「集補江総白猿伝一卷」とある)のからは、或は江総の書いたものによりつつ、それを白猿の物語りにしてて、そう呼んだものかとも考えられる。

と述べておられる。重要な問題ではあるが、本稿にその解答は必要なく、先述の梗概を持つ『補江総白猿伝』を『白猿伝』と呼びたい。

『白猿伝』の単行本が存在したことは、『新唐書藝文志 子部小説類』『郡齋讀書志 史部伝奇類』等が伝えている

が、小説類が多くそうであったように、『白猿伝』も叢書に入れられることによって後世に伝わった。したがって、『白猿伝』は日本にも叢書に含まれる形で輸入されたと考えてよい。『白猿伝』を含む叢書で、江戸期に輸入されたものを調査すると、次のようになる^⑧。

- 『太平広記』 ×『顧氏文房小説』
- 『唐宋叢書』 ×『唐人百家小説』
- 『説郭』 ×『虞初志』
- 『唐人説薈』 『龍威秘書』

(元文四年当時、輸入されていたものに○印、輸入されていなかったものに×印をつけた。当時『唐人説薈』『龍威秘書』はまだ成立していなかった。)

この輸入三叢書の内、『太平広記』巻四四四は『白猿伝』と内容は同一ながら、「欧陽紇」を題名としているので、『白猿物語』に直接、受容されたとは言いがたい。『唐宋叢書』は江戸期に四度輸入されているが^⑨、元文四年までに『白猿伝』を含んだ巻は輸入されていない^⑩。すると、元文四年の『白猿物語』成立時に『白猿伝』を読むことは、『説郭』百十三巻所収のものをもって可能となったと考えられるのである。事実、先述の『桜陰腐談』巻一も「會聞説郭之中。有_レ似_二彼俗説_一者_二在_レ耶_⑪」とし、『広益俗説弁』巻十も『説郭』『白猿伝』に記せり^⑫。』として、『説郭』を引いているところから、当時の『白猿伝』のテキストが『説郭』によっていることが了解できるのである。

『説郭』は、江戸時代前期の詩人達に多く読まれた形跡があり^⑬、元禄から元文四年までだけでも三回輸入されており^⑭、当時の読書人の間で注目された書物であったことが推察できる。荷田在満と漢字との接点については、宇佐美喜三八氏^⑮が、その歌論研究の立場から、在満の漢字との交渉、古義堂との関係の可能性を述べておられるし、漢書を多く所蔵していた田安家との関係もある。その上、在満の歌学、国学等の教養を考慮すれば、『説郭』を読ん

た可能性は高い。しかし、いくら彼の博学をしても、『說郭』を読み、百二十卷千三百六十四種の中から、わざわざ『白猿伝』を選び受容したと考えるのは難しいのではなからうか。

そう思えば、在満が『白猿伝』を読み、受容したのは、先述の随筆書『桜陰腐談』『広益俗説弁』からの間接的な可能性が高いと考えられるのである。

だが、在満がそれらの可能性を捨てて、『白猿伝』を読まなかったとしても、白猿が活躍する話は、『白猿伝』以外にも存在する。次にそれを論じる。

(二) 「白猿物」の流行

『白猿伝』と呼ばなくとも、全く同じ内容をもつのが『太平広記』『歐陽紇』であることは先に述べた。他にも、『白猿伝』の類話として、猿が女性を盗んだり、その女性達を軟禁したりして、退治されるという話は多い。成行正夫氏は、この白猿伝説を記した文献及び白猿伝説に基づいて作られた小説について、

- 一、後漢、焦延寿『易林』坤之剝
- 二、晋、張華『博物志』
- 三、唐、無名氏『補江総白猿伝』
- 四、宋、徐鉉『稽神録』
- 五、明、洪梗『清平山堂話本』卷三「陳巡檢梅嶺失妻記」（馮夢竜『古今小説』卷二十「陳從善梅嶺失渾家」）
- 六、明、瞿佑『剪燈新話』卷三「申陽洞記」
- 七、明、陸粲『説聴』
- 八、明、凌濛初『初刻拍案驚奇』卷二十四「塩官邑老魔魅色会骸山大士誅邪」

と分類されているが、3の『白猿伝』を挟んで、その系譜がよくわかる。

『白猿物語』の本文中にある「ましらかの人を洞のうちにこめおきて」「ましらがかたときもかたはらはなれやらねば」などの箇所から、「白猿」が主人公を捕まえ、軟禁していると読めば、1の『易林』、2の『博物志』巻三、更に『搜神記』巻十二との関係が考えられる。それは、右の中国文献が雌猿が女性を拉致するという内容なので、『白猿物語』の場合、雌猿であるから、男女の立場を入れ換えて再現したといえるからである。

中野美代子氏⁸⁾は、この猿が拉致する源流に、「女国幻想」を考えられ、『山海経』巻七海外西経、『淮南子』巻四地形訓、『博物志』巻二、『大唐西域記』巻十一などを報告され、単性の種族維持のための、拉致、異類婚姻譚の形成を考えておられる。その中で、『斉東野語』巻七「野婆」をあげられているのが興味深い。山野をかけめぐる、猩猩であるらしい野女、野婆と呼ばれる雌ばかりの種族があり、「毎^レ遇^二男子^一必負去求^レ合」(『文淵閣四庫全書』より訓点は森田)というのである。『白猿物語』の猿たちは「ましらども」「さる」としか形象されていないが、これを雌猿ばかりの群と考え、その頭の白猿が「いもせのまじわり」を求めたと解釈すれば、『斉東野語』との関係が浮かんできく。ちなみに『斉東野語』は江戸前期に松浦交翠軒によって和刻本が出版されている。

しかし、右のような話の主人公は白猿ではないし、『白猿物語』の素材とは成り得ても、翻案ほどの密接な関係は指摘できない。その点でやはり『白猿伝』であり、『白猿伝』の影響を受けて成立したと考えられる、多くの話も『白猿物語』との関係では『白猿伝』に及ばない。

とはいうものの、前掲成行氏の5には注目できる。特に『古今小説』巻二十は、内容が『白猿伝』と極めて近いだけではない。

『白猿物語』の十年後に刊行される、都賀庭鐘の『古今奇談英草紙』(寛延二年刊)は、この『古今小説』の翻案と考えられる話をいくつか収めるが、彼の第二作『古今奇談繁野話』(明和三年刊)の序をして、「白菊の巻は白猿梅嶺^{はくぐんばいれ}の旧趣を仮^り」(傍点は森田)とする。そこから推量すると、庭鐘の場合、『古今小説』巻二十「陳從善梅嶺失渾家」をし

て、「白猿」物語として看取していたことが了解できる。享保年間頃の白話小説の流行、中でも三言二拍の流行（三言二拍）の一つ『喻世明言』巻二十（『古今小説』巻二十）も考え併せるなら、同時代人、在満もまた『古今小説』巻二十を受容したと考えられるのである。

以上、分析した結果、『白猿物語』が『白猿伝』を意識して創作された可能性は強い。その場合、二つの可能性がある。一つは『説郭』百十三巻所収『白猿伝』をテキストとした場合で、これにも直接『説郭』から『白猿伝』を読んだ場合と、間接的に『桜陰腐談』などの随筆書から『白猿伝』の本文を読んだ場合の二つの状況が仮定できる。又、一つは「白猿物」からの受容で、『太平広記』や部分的には『白猿伝』の系譜に連なる説話・小説類が考えられるが、当時の白話小説、中でも三言二拍の流行を思えば、『古今小説』巻二十を読んだ可能性が強いといえる。『白猿物語』の成立にかかわる『白猿伝』の影響は、右の二方面からの可能性によると結論するものである。

三

『白猿物語』は、『白猿伝』あるいは白猿物に基づいて作られた小説類の翻案物として成立したのかというと、二で分析した結果から、可能性であって、決定項を得ない。それは作品の読みの側からも言えることで、右の中国小説が婦女略奪とその退治に中心を置くのに対し、『白猿物語』が漂流譚として展開しているところに相違を認めざるを得ないからである。しかも、『白猿物語』は、相模の人が体験した漂流譚を

これは我とも、小泉のなにがしいとけなかりしほどに、やそぢあまりのおきな、かの相模なりける人とうるはしかりしが、きゝつるよしかりけるとぞ。

という聞き語りとして、締めくくる。その信憑性はともかく、体験談であるとするのである。したがって、『白猿物語』は何故このような体裁が必要であったかということが問題となる。

『白猿物語』が異界物語として構想されていることは、その文芸性の解明から了解できる⁸⁰。そのような奇異・怪異譚がその信憑性を強調するのは、和漢を問わず存在する。例えば、先述の『清平山堂話本』の最後の「翰府名談にてはござれども今時の佳話に編みなしはべる⁸¹」や『因果物語』下の二十一「同じ町の正庵と云ふ人、委しく知つて語る也⁸²」という結び方である。この形式は他にも多いが、在満自身、彼のもう一つの戯作『落合物語』（寛保二年識語）の結びも「……まさしき事になんあると、ある人のかたりしまゝにしるしぬ⁸³。」と用いる常套のものなのである。

しかし、『白猿物語』の場合は、単なるこの形式の踏襲だけではなく、読者を漂流譚に誘い込む必要があったと考へるべきである。それには、当時の読者層が西鶴の『本朝二十不孝』巻二の三や御伽草子『御曹子島渡』などにみる漂流奇譚を読み、実際に頻発する漂流事件に興味を持っていた読者の期待を利用したことも考えられようが、『白猿物語』成立の元文四年に、実際に当時の人々を驚嘆させる、漂流事件があったのである。

(イ) 元文四年の漂流事件

この事件は、石井研堂本『漂流奇談全集』の「遠州船無人島物語」に詳しい⁸⁴が、

元文四未年、五月無人嶋より貳拾一ケ年目に帰来り候、遠州荒井の者、吹上上覧所江被召出、嶋々様子等段々御尋の事という尋問の記録であるので、事件の概要をまとめると以下である。——享保四（二七一）年十一月末日、遠州荒井の廻船、船頭左平次ら十二名が、房州九十九里浜沖で吹き流され無人島⁸⁵に漂着した。船は岩にあたつて破船したので、十二名は上陸し、山中にあった岩穴を居所に定め、魚や鳥をとつて食料とし、天水をためて飲料水とした。三年間程は十二名残らず存名したが、その後十年ばかりのうちに九名の者が死んだ。生き残つた三名の者は、助かるあ

てのない無人島生活を続けること十九年余に及んだが、元文四年三月末、たまたま江戸堀江町の宮本善八の船（十七人乗）が漂着した。この船も破船してしまったが、てんま船を引上げておいたので、一行二十名は、四月二十七日この島を脱出し、五月朔日に無事八丈島に着くことができた。——この事件は八代將軍吉宗の上聞に達し、元文四年六月三日、輯取甚八（六十七才）、水主仁三郎（六十一才）、平三郎（四十二才）は、吹上上覧所に召出され、幕府の重役や奥医師達が列座するところで、色々と尋問された。その記録が「遠州船無人島物語」である。それが石井研堂本『漂流奇談全集』に収録され、さらに再収録した『日本庶民生活史料集成』の「解題」には、

彼等が在島中に細工した珠数を、吉宗は自ら手にとってみたといわれる。將軍が漂流を江戸城内で上覧した例は、後に第十一代將軍家斉が、「北檣聞略」の主人公・大黒屋光太夫と磯吉を吹上御庭に召出した上覧した例があり、恐らく吉宗と家斉の二人であろう。將軍の上覧は異例のことであったから、甚八らのこの事件は、たちまち世間の大評判になり、芝居にもなつて上演されたといわれる例。

とし、三人に目付や足輕がつけられ、江戸市中も駕籠で行き来するように仰付けられた格別の待遇であったことも書いている。右から、元文四年にこの漂流譚が、如何に世間の耳目を驚かす大事件で、話題となったかが容易に想像できる。その後も故郷に帰った三人は、領主から各々三人扶持を与えられ、一生の安堵があるなど、破格の処遇であった。これらの事實は、漂流帰国した三人が、当時の一大ヒーローであり、戯作化するには、最高の話題性と即時性に富んだ素材であったことを示している。

漂流した三人がこの事件を將軍の前で語ったのが、元文四年六月三日である。『白猿物語』の奥書は「元文末のとし（元文四年）みな月（六月）望の夜（十五日夜）たはぶれにします」としてその成稿時期を示している。もし、この漂流事件が『白猿物語』の成立に影響しているとすれば、作品は至極、即時性と実録性を有しており、それは非常に興味ある文芸性を呈示していることとなる。次にその可能性を探りたい。

(ロ) 『白猿物語』と遠州船漂流譚

ここに『白猿物語』と遠州船漂流譚との決定的な類似点をあげると、次の三つになる。

- (1) 難風により無人島に漂着。
- (2) 岩穴に居住。

- (3) 脱出の際、偶然漂着した船に助けられる。

(1)の無人島は鳥島であることを報告しているが、作品化に際し、猿島に代えたと考えられる。(2)については、『白猿物語』の男が「ほがらかなる洞」に居住する合理性と結びつく。(3)について、船に助けられることは漂流譚として当然であるが、『白猿物語』は「いかなる国の舟にやありけん、これも我ごとく風をいたみ吹はなたれしと見えて」として、事件と同じく、偶然の漂着船によって救出されているのである。

細部を検討すれば、他にも類似点は見出せるが説得力に欠けてしまう。ただ、『白猿物語』と漂流譚の関係を仮定するならば、この三点で十分と考えている。しかしながら、在満が『白猿物語』にこの漂流譚を右のように利用しているとするれば、非常に正確、詳細でかつ、逸早く知ることが出来る情報源を有していなくてはならない。先述したように、その情報源を在満は「我とも」「小泉のなにがし」とするのである。次にそれを検討する。

(ハ) 荷田在満の友人「小泉のなにがし」

在満は「我とも」とはするものの、京都在住時の人物に、適当と思われる小泉氏は見当たらない。むしろ、江戸在中に出来た友人と考え、次の三人をあげた。

(A) 小泉勘兵衛(元文五年当時、御徒目付)

——『大嘗会便蒙御咎願末⁸⁹』——より

(B)小泉清光（元文四年当時、御書院番）

祖 小泉吉次（清和源氏支流）

——『寛政重修諸家譜』卷第三百九十一——より

(C)小泉義易（寛保元年当時、大番）

祖 小泉吉次養子吉勝（藤原氏支流）

——『寛政重修諸家譜』卷第九百三十七——より

(A)の勘兵衛は、在満の元文四年『大嘗会便蒙』出板事件に伴い、元文五年、在満閉門中に訪れた、その板木没収の際の役人である。公的な問題処理に、咎人の友人を交渉に差し向ける私情が許されたのか、御徒目付という役職の者と親交があったのか等疑問を残す。(B)の清光は元文四年当時、三十五才前後であり、在満三十三才前後と友人関係としては適年齢と考える。又、御書院番という役職の性格上、御小性などから、将軍上覧の情報を知ることとも出来たであろう。更には、在満が「小十人格⁹⁰」であるところから、役職上の接触及び、家格の相応な点からも友人であった可能性が高い。(C)の義易は当時四十一才前後で、年齢差から「我とも」とするには憚られるように思う。又、役職上も将軍に近侍していた人々から情報を得られた可能性という点では、書院番に及ばない。したがって、(B)の小泉清光を「我とも小泉のなにがし」と仮定するに妥当な人物と考える。

(二) 小泉清光と「浦島伝説」

ところで、その小泉清光は荏原郡を領していた。その西隣の橘樹郡には、江戸期において「浦島伝説」が存在していた⁹¹。現在の横浜市神奈川区浦島ヶ丘に名をとどめるとともに、天明八年に蓮法寺に浦島父子と竜宮の乙姫供養塔

が出来ているところ^例からも、この話はかなり古くから（少なくとも天明八年の五十年前の元文四年当時）伝えられていたのではないかと考えられる。

この「浦島伝説」の特徴は、浦島太郎を相模出身とすることである。『白猿物語』の主人公も「さがみの国に住みける人」である。男が異郷（この場合、龍宮に代わる無人島）に一人残されて、故郷をなつかしく思いながら、三年の月日を送るのは「浦島伝説」を素材としたと考えられる。その「浦島伝説」を「今浦島」の遠州船漂流譚の生き残り三人の話にオーバラップさせて、小泉清光がある戯話^{ざればなし}として、在満に提供したとすればどうであろうか。『白猿物語』の小泉の某が幼い時に老人に聞いた話という趣向は、「浦島伝説」を古老がまだ童であった小泉清光に語り聞かせたことを意味しないであろうか。

ちなみに、在満の二作目の戯作『落合物語』についても、先述のように聞き書きの体裁をとるが、この話は豊島郡上落合村が舞台となっている。豊島郡は荏原郡の東隣である。ここにも小泉清光が隠見しているのではあるまいか。小泉清光の祖、小泉吉次は、豊島・荏原郡の二郡を賜わり、橘樹郡の妙泉寺に葬られている。小泉氏の勢力がこの三郡に及んでいたことを示すものである。

このような事情において、小泉清光を情報提供者と推論するのは、強ち冒険ではないように考える。

(ホ) 「浦島伝説」と「ましら」

では、在満が小泉清光から得た「浦島伝説」を、なぜ『白猿物語』の猿物語と結びつけたのであろうか。作品中で猿を「白猿」も含めて、「ましら」としているが、この歌語「ましら」に意義が見出せるかも知れない。

作品中、「ましら」は「まったく知らないで」という意味を掛けたり、「枕」と掛詞としたりする言語遊戯を行っている^例。又、本文中で難風に苦しめられる様子を

いとあらましきあらしま風……

とするのは音韻的な遊びだけでなく、これから登場する「ましら」を予告していると思われる。そのような「猿」ではなく、「ましら」に固執する在満の創作意識は、何にあるのであろうか。

ここに臆説が許されるのなら、在満と中世の『宣胤卿記』との関係を挙げたい。『宣胤卿記』に謎立のがあることは知られているが、その謎立一つに

そのかみうせしうら嶋かへる

がある。正解は「ましら」である（「うらしま」「かみうせし」によって↓「らしま」「かへる」によって↓「ましら」）。すなわち、「ましら」と『白猿物語』に隠見する「浦島伝説」とは、何らかの符合を持つのである。在満は『家記所繫考』一卷を著わしており、その中で『宣胤卿記』の書誌も整理しているのである。在満がその謎立を利用したとすれば、「うらしま」と「ましら」は隠微な関係として、『白猿物語』に作用しているといえるのである。

四

以上のように分析すると、『白猿物語』は小泉清光の語る遠州船漂流譚と「浦島伝説」及び、その連想からくる「猿」などを動機として成立したことになる。しかし、そのような「小泉のなにがし」からの情報は即事性があり、面白い素材ではあるが、建部綾足の読本『西山物語』が「源太騒動」を利用しながらも、単なる際に終っていないように、『白猿物語』も漂流事件だけを骨子に成立してはいない。他なる在満の文学的教養がその世界を形成していることは当然であるが、成立に関しては、『白猿伝』もしくは「白猿物」という中国文学の影響を無視して考えることはできないのであるまいか。その二者よりの成立を考えた場合、在満が「たはふれにしろ」とするのも単なる聞き書き

による戯作を意味するのではなく、実験小説的な意味合も含まれていたのかも知れない。即事的な事件を利用し、中国小説によって構成し直すこの方法は、当時の文芸作品に飽き足らない、新しいジャンルを現出することを企図していたと考える。その在満の創作視点が、後の「読本」のジャンルにつながる、『白猿物語』の文芸性として顕在化しているのである。

註

- (1) 拙稿「荷田在満『白猿物語』の研究」「四、『白猿物語』の文芸性」(『日本文芸研究』第四十四卷三号)
 - (2) 宇佐美喜三八氏「荷田在満遺作の物語について」(『水滸』昭七、八・十一月号)「長頭丸随筆と白猿物語」(『水滸』昭七、十二月号、昭八、二・三月号)の小稿などや、藤岡作太郎氏が『近代小説史』(大倉書店)で小説史の体系的観点から触れられているのにとどまる。
 - (3) 拙稿(註(1)に同じ)「三、『白猿物語』の本文」
 - (4) 『日本随筆大成第一期 五』(吉川弘文館 昭五十刊)。
 - (5) 『酒吞童子と白猿伝』(『中世説話の文学史的環境』(和泉書院) 昭六十二刊所収。高橋昌明氏『酒吞童子の誕生』(中公新書) 平成四刊など。
 - (6) 芸能類は山本角太夫正本『酒吞童子』(延宝四年刊)近松門左衛門作『酒吞童子枕言葉』(安永四年初演)他、丸本、豊後節、常盤津等に及び、読物類は、黄表紙十返舎一九『大江山物語』(寛政十二年刊) 恋川春町『化物大江山』(安永四年刊)等、往来物、合巻、絵本、後期読本、摺物等、その裾野は広く展開している。『丹後郷土資料目録』(舞鶴市教育委員会編)に詳しい。
 - (7) 『益軒全集卷七』(国書刊行会) 昭四十八刊の凡例による。
 - (8) 乾一夫氏「補江総白猿傳論」(『国学院雑誌』七一九 昭四十九)
 - (9) 内山知也氏「補江総白猿伝について」(『隋唐小説研究』(木耳社) 昭五十二刊所収)。
 - (10) 『唐代小説について——白猿伝』(『愛知県立女子大学紀要』十二号)
- (11) 大庭脩氏の『江戸時代における唐船持渡書の研究』(『関西大学東西学術研究所』 昭四十二刊)『舶載書目』『購来書籍目録』等の御業績に基づき調査し、山脇悌二郎氏解題、内閣文庫『唐蛮貨物帳』『長崎御用留』内閣文庫目録等を参考にした。江

戸以前については、書籍・書目集で確認。

(12) 宝永七、正徳元、元文五、寛延四、不明二種。

(13) 『二酉洞』(一色時棟纂輯 元禄十二年刊) 天理図書館所蔵本で確認。

(14) 『仙台叢書第一卷』(仙台叢書刊行会) 大十一刊。

(15) 『広益俗説弁 東洋文庫五〇三』平成元刊。

(16) 中村幸彦氏「石川丈山の詩論」『中村幸彦著述集第一卷』(中央公論社) 昭五十九刊所収) において、丈山と『説郛』所収の詩書との関係を指摘されているが、他にも考えられる。

(17) 註(1)による。

(18) 「荷田在満の研究」『近世歌論の研究』(和泉書院) 昭六十二刊。

(19) 「白猿伝の系譜」『芸文研究』三三 昭五十)

(20) 「孫悟空の誕生」(玉川大学出版部) 昭五十五刊。

(21) 『日本名著全集 第十卷怪談名作集』昭二刊より旧字改訂。

(22) 註(1)に同じ。

(23) 『宋・元・明通俗小説選』(平凡社) 昭四十五刊。

(24) 『江戸怪談集 中』(岩波文庫) 平成元刊。

(25) 国立国会図書館所蔵本より翻刻。

(26) 『日本庶民生活史料集成 第五卷』(三一書房) 昭四十三刊所収。底本は、国会図書館所蔵の写本。

(27) 東京都、伊豆諸島最南端の火山島「鳥島」を指す。

(28) 『校訂漂流奇談全集』(博文館) 明三十三刊。

(29) 註(26)に同じ。

(30) 管見では不明。

(31) 『京都名家墳墓録』等調査。

(32) 「小泉勘兵衛」は『寛政重修諸家譜』には見当たらない。調査した『大嘗会便蒙御答願末』は『荷田全集、第七卷』(官弊大社稲荷神社(吉川弘文館)) 昭六刊所収本を用いた。

『白猿物語』成立論

63 『大嘗会便蒙御答願末』〔註62に同じ〕に、「小十人格羽倉藤之進」とある。

64 『日本伝説大系第五卷』『日本昔話資料集成三十五』等。

65 『日本の伝説 神奈川の伝説』（角川書店）昭五十二刊 三十三頁。

66 註(1)に同じ。

67 『増補資料大成四十四』（臨川書店）「宣胤卿記一」（二巻の内）。

※本文において『説郭』としているのは、元末明初の陶宗儀による一百巻本を指すのではなく、明の陶埏重輯といわれる『重校説郭』百二十巻を指している。その編纂問題については、渡辺幸三氏「説郭攷」（『東方学報京都九』）、倉田淳之助氏「『説郭』版本諸説と私見」（『東方学報京都二五』）等に詳しい。ただ、倉田氏が、その中で述べられている、「五朝小説」と『重校説郭』については、問題が残されているように思う。なお、『五朝小説』を『静嘉堂文庫漢籍分類目録』（昭五）から調査する限りは、『白猿伝』を含んでいない。

尚、脱稿後、『元文四年奥州房州海辺ニ唐船漂泊之記事』（秋田県立図書館所蔵写本）、『元文四年覚書』（東京大学史料編纂所蔵写本）を閲覧したが、いずれも唐船漂着に関する記事であり、直接『白猿物語』との関係はない。

本稿は(一)章で述べたように『白猿物語』の世界の本質解明の一環としての「成立論」である。『白猿物語』の諸本、本文は、『荷田在満』『白猿物語』の研究」（『日本文芸研究』第四十四巻二号）の第二、三章及び、『白猿物語』の本文研究」（『東大阪短期大学研究紀要』十五・十六号）で発表し、『白猿物語』の構想、表現技法、主題については右の「荷田在満『白猿物語』の研究」の第四章『白猿物語』の文芸性」で論じている。併せてご参照いただきたい。

〔付記〕 本稿は平成二年度日本近世文学会春季大会（於学習院大学）及び、和漢比較文学会第二十八回（西部）例会（於九州大学）での口頭発表をもとにまとめたものである。会場等でご助言をいただいた先生方に感謝申し上げます。又、資料の閲覧・複写を御許可いただいた各機関に併せて御礼申し上げます。